

平成25年度千葉市・大学等共同研究事業報告

定住人口増加に向けた千葉市ブランド構築に関する研究
— データからみえる持続可能な循環型シティライフの可能性 —

櫻井尚子*

千葉市では毎年、千葉市・大学等共同研究事業と称して、千葉市が抱える現実の問題解決のために、さまざまなテーマを題材に共同研究をすすめ、成果を市の発展に生かしている。この研究事業では、大学等教員と千葉市の担当部署の職員とが共同で研究を実行する。

<http://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/sogoseisaku/kikaku/kyoudoukenkyuu.html>

毎年2件の共同研究が採択され、千葉市総合政策局総合政策部政策企画課の職員の方(2名)と東京情報大学の研究チーム(4名)で研究組織を立ち上げ、研究を遂行した。研究のきっかけや過程、結果等について簡単に紹介する。なお、報告書の全貌はすでに千葉市のホームページ上で公開されている。(上記URL内、平成25年度共同研究報告)

キーワード：千葉市・大学等共同研究事業、定住人口増加、データ分析、問題解決、暮らしのブランド

The report on joint research with Chiba city in 2013

Research on Branding Chiba City for
Promoting Increase of Permanent Residents

Naoko SAKURAI*

A brief summary of the research on branding Chiba city for promoting increase of permanent residents carried in 2013 is reported. The whole result has been uploaded in Chiba city home page; <http://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/sogoseisaku/kikaku/kyoudoukennkyuu.html>

Keywords: joint research of Chiba city and research institution, increase of permanent population, data analysis, solution to a problem, branding of daily life

*東京情報大学 総合情報学部
Tokyo University of Information Sciences, Faculty of Informatics

千葉市では毎年、千葉市・大学等共同研究事業と称して、千葉市が抱える現実の問題解決のために、さまざまなテーマを題材に共同研究をすすめる、成果を市の発展に生かしている。この研究事業は、大学等教員と千葉市の担当部署の職員とが共同で研究を実行するスタイルである。

<http://www.city.chiba.jp/sogoseisaku/sogoseisaku/kikaku/kyoudoukenkyuu.html>

毎年2件の共同研究が選択され、千葉市総合政策局総合政策部政策企画課の職員の方（2名）との平成25年度共同研究として後述の研究組織を立ち上げ、東京情報大学の教員（4名）が参加した研究のタイトルが冒頭のものである。研究のきっかけや過程、結果等について、この紙面を借りて簡単に紹介する。なお、報告書の全貌はすでに千葉市のホームページ上で公開されている。（上記URL内、平成25年度共同研究報告）

【研究目的】

千葉県の人口は、平成23年までは増加傾向にあったが、翌年の平成24年からは一転減少に転じ、現在もそれが継続している。また、千葉市は、県の現象よりは緩やかであるが、やはり平成24年にそれまでの増加に歯止めがかかり、わずかながら減少傾向を示した。以降、若干の増加はみられるものの、自然増減・社会増減の推定から、平成27年を頂点に緩やかな減少傾向を辿ることが予想されている。これをもとに、千葉市では減少を食い止める策（社会調査やちらし配布等）を、ターゲットを絞りながらいろいろ講じてきている。本研究では、千葉市が魅力的で持続可能な生活型都市として存続するための策を探るため、定住人口の増加対策に貢献することを研究目的に掲げた。市の魅力を整理し、ひろくアピールすることで「住む場所」としての選択につながる対策を、データ分析から抽出することが有意義であると考えた。また同時に、従来千葉市で作成され配布されてきた

PRチラシの効果についても測定を行い、分析対象に加えた。

【研究体制】

所 属	氏 名
東京情報大学 総合情報学部	櫻井 尚子*
	内田 治
	藤原 丈史
	樋口 大輔
千葉市 総合政策局 総合政策部政策企画課	小花 信雄（主査）**
	坂入 修一（主任主事）

* 共同研究代表

** 平成26年は部署異動

【研究方法】

以下の手順で研究をすすめる、毎月1回の定例ミーティングで情報交換を行い、問題点等を協議し、問題解決への道筋を模索した。

（1）現状調査

千葉市と似た市や評判の市、遠い地域であっても独自性を持つ市等、本研究に有効な情報を集めるために、共同研究担当者間で地域を決め、詳細な情報を集め、それらの一つ一つについて、全員で検討した。

例：千葉県内の他市、関東圏の市、それ以外の市

（2）評価

千葉市がこれまでにやってきた各種調査の結果、配布チラシなどの成果をもとに、千葉市のイメージ特徴を分析し、今後の調査研究の資料とした。

（3）アンケート調査「千葉市の魅力と住みごこちアンケート」

（1）（2）の結果を踏まえ、本研究が目指す調査内容を検討するとともに、調査対象を子育て世代に絞り、具体的には千葉市内保育所・保育園に子供を通わせている保護者とした。調査要請には、市の保育所（園）の担当部署の協力を得ている。また、調査対象者数12,000名分の要請用紙を各保育所（園）に郵送するための作業

は短期間で仕上げる必要が生じたため、東京情報大学の数名の学生および本研究担当教員の協力を得てなんとか実現にこぎつけた。実際の調査はWeb上のシステムを使い、回収率は約6%であった(671件)。

(4) 推進策提言

(1)～(3)の全ての結果を踏まえ、定住人口増加へ向けての提言をまとめた。

【調査の解析結果】

通常の集計(単純、クロス)に加えて、ロジスティック回帰分析、コレスポンデンス分析、テキストマイニング等の多変量解析の手法を使ってデータから抽出される情報をまとめた。主な内容は以下の通りである。

1. 特に「そう思う」こと

日常の買い物が便利、気候が良い、病院が多く安心、子育てしやすい、自然環境に恵まれている等の項目が上位を占める。

2. これからも住み続けたいか

5年未満の人に他へ移りたいという意見が多い。海や広い土地でアクティビティを重視する男性からの支持率が高い。

3. 区ごとの特徴

中央区、稲毛区は仕事の都合で住んでいる(通勤の都合)、花見川区は古くから自身の土地・家を有している、美浜区は親戚一同が近くに住んでいる、等の結果が出ている。

4. 千葉市の魅力

自然(緑)が身近にある、都会と田舎のバランス、海がある、の3項目が顕著なものとして挙げられている。

【提言】

調査結果、従来からの取組みへの評価を受けて、短期・中長期・長期的な視点から提言をまとめた。短期的には、千葉市がすすめている従来からの手法をもっと強化し、よりターゲットを絞り込んで市の魅力をアピールすることが挙げられる。市の職員の方々の名刺にも同主旨の

工夫を加える。コンテストによる市への視点集中ねらいも有効な手法である。中長期的には、大学生へのインタビュー結果も加えて、大学生の研究活動による千葉市の活性化案が挙げられる。情報ツールを利用した歴史探訪や人物紹介、観光資源紹介等、実際の活動とそれをもとにしたデータ分析により、知られていない魅力の発掘をすすめ、学生にとってもそれが学びの材料となるよう、お互いの立場を生かした施策が有効である。長期の視点としては、千葉市の暮らしやすさを前面に出し、「暮らしのブランド」としての新たな側面を追求・宣伝していく方向が挙げられる。ブランド構築に際しての4つの価値基準を列挙する。

① 基本価値

② 便宜化価値

③ 感覚価値

④ 観念価値

上記のいずれも、相反する価値が同居しており、尖った価値を見出せていない。また、観念価値についても、物語性や歴史という側面での千葉市のイメージは今回の調査からは見いだせていない。この結果から、千葉市は「暮らし」を基点とする価値にブランド化の可能性を残しているとの結論に達している。すでにブランドイメージが定着した他都市(横浜市、鎌倉市等)との比較ではなく、千葉市は「ほどよく都会と田舎が同居する日常的な実用性が高い都市」という、毎日の生活においての暮らしやすさという現実感をブランドとして立ち上げ、それを徹底することがむしろ差異化になるのではないか、というのが、長期視点での結論である。ブランドもまた、関係する人々の努力のもとに成り立つものなのである。

以上、共同研究の経緯と結果を簡単に記した。普段の暮らしの中で感じたことを調査に盛り込み、その結果を行政の今後の活動に生かしていただくべく、研究メンバー一同励んだ次第である。千葉市の方々とともに研究メンバーは毎月の打合せをもち、進捗報告ならびに意見交

換を行い、研究目的に沿ってそれぞれの専門の領域で役割を果たした。研究成果が生かされていくことが一番の願いである。なお、本研究の成果は、平成26年度の公開講座として地域の方々へお伝えする機会を持った。最後に、本共同研究は、市内の保育所（園）のスタッフ、保護者の方々、また、千葉市や学内の事務スタッフおよび学生の協力なしには遂行が難しかったことをここに記し、感謝の意を表したい。